UG REPORTS

1993.12.25 Vol.11

我々自身を知り、豊かさを追求し、未来を見つめるー。

UGビジネスクラブは、在日コリアン企業の社会的地位の向上とビジネスネットワークの確立、情報収集と事業機会の拡大を設立理念として、1990年11月に結成されました。

KOREAN CHAMBER OF COMMERS AND INDUSTRY IN JAPAN

U·G BUSINESS CLUB

SINCE·1990

目次

- 中国視察レポート
- 情報交流事業部会
- 理事会・関東ブロック
- スタディ／ガルブレイスを読む。

中国視察レポート

去る10月25日から29日までの5日間、UGBC関西ブロックでは、新事業投資研究部会の協力を得て、中国視察旅行が行われた。胎動する中国経 済の息吹を肌で感じ、見聞を広め、今後の海外投資計画のための情報収集の一環として企画されたこの度の「上海・深センかけ足旅行」をレポートする。

10月25日

▪歴史作結と近代化が同居する領一上海

全国から参加したメンバー10名を乗せたJAL793便は25日正午、一路上海に向け大阪空港を飛び立った。上海との時差1時間を調整するため、時計の 針を戻す間に流れたアナウンス「右方向に見えるのが韓国の済州島です。」その瞬間、メンバー全員の首が右に向いた。

まだ見ぬ故郷に郷愁を感じ、複雑な思いを抱いたのは済州島に故郷を持つ筆者ばかりではなかったろう。澄み渡った空を横切ること約2時間後、一行は青空の 大睦の地に降り立った。上海空港ロビーでガイドを待つほんの少しの間に最初のハプニングが起こった。口髭をはやしたジャンパー婆の中国人男性がなにやら険 しい表情でメンバーの何人かに向かって問いただしているのだ。その手・振りからして「ここでタバコを吸っていた男はどこへいったのだ？」と言っているよう であった。そこへD氏がトイレから戻ってきた。男はD氏に向かってわけの判らないことを言いながら手を差し出す。クエスチョンマークの表情の我々に対し男 は「パッキン！パッキン！」と言って、ポケットから顔を出したばかりの千円札をもぎ取るようにして去って行った。

空港を一歩出ると、タクシーのクラクションがけたたましく鳴り響いていた。荷物だけをホテルに届ける業者が送迎車とは別に荷物を運ぶという。不安な気持 ちを禁じえない一行はほぼ強引に自らののトランクを送迎車に積み込み、4台のフォードで迎賓館（シェラトンホテル）へと向かった。ほとんどがワーゲン車の タクシーは初乗り1.6元(32円)で、小型車は1.2元(24円）である。どの国も空港周辺は込み合うものだと思いきや大通りは道行く自転車、タク シー、トロリーバスなどで終始渋滞していた。そのことを重々承知とばかりに車は横道、裏通りを走り抜けた。すると道の両側では「戦後復旧建設」が行われて いるものと察しがつくものばかりでまさに人海戦術による建設などがなされていた。

のちに見る都心の高層ビルやホテル、高速道路や大橋梁とのギャップの激しさ。市街地における戦前からの歴史の匂い漂う町並みとの同居–現代化した国際的な大都市づくりに向け、まい進する上海の姿が車窓を横切った。

テストショップ・上海第一入首伴（ヤオハン）

チェックインが済むや否や一行はタナベ経営から紹介のあった、上海帯一八百伴を訪問した。テストショップとしで93年５月30日にオープンした同店は 600の1階ワンフロアー。日本から出向されている、商品本部衣料部長の久保田陽一さんの案内で、現代的なフアザードを構える店舗とは裏腹の薄暗い階段を昇った2楷の応接室に招いて頂いた。

日本人2名が常時滞在している同店は、もと衣料品店をその営業権と社員160人とを八百伴が引き取ったものだ。従業員100人で2交替制とし、承りの40人は外商、事務、貿易に従事している。

取扱アイテムは衣料（日本制＝90％、香港制10％）、アクセサリー、靴、バッグ、女金属、化粧品（資生堂、コーセーが主）、そしてAV機器など、日本 から2〜3掛で仕入れるMADE　ＩＮ　肝州がセールスポイント。少々高価あっても、品質が良いので売れるという。

客の特徴として、株や不動産で儲けた人や高級幹部などは全体の一部であって、多くは増加傾向にあるニューリッチの現地の人たちだ。売価は合弁商品で 500〜600元（1万円〜1万2千円）の価格帯で、上海の平均年収が3,000元であるというところから庶民にとってはまだまだ高根の花といえよう。

消費者毎に差はあるものの、ファッション感覚のすすんだ女性がメーン・ターゲット。男性層はファッション意識が薄く、メンズは売れにくいという。よって、同店ではレディスの合弁製品探しに入れ込んでいる。

中国視察レポート

「仕入面に不自由はない」という理由には、合弁製品が増えている現状があげられる。完成品の10％～30％が国内で販売できるか否かが合弁工場の必要条件であるが、それが増えているということは国内で製品が売れ出したことを象徴している。

浪人品の課税対象としては、仕入れルートを香港→深セン→上海といったように香港回りにする事で、60％～90％の関税を50％におさえる工夫を講じている。頭の痛い問題もある。

一つには社員教育。当初は特に、笑顔がない、釣り銭をほうるなどなど。これらは売ってやるという意識がそうさせていたようだ。勃斉は丑かになったものの、サービス精神はなかなか上向かないという。

対発としては、錬列・壊客に救青ポイントを荘く。というのも・見本を見せて売るという日本での一般的な売り方を理解してもらえなかったからだ・

実耕などについては報酬として、給料にはねかえすことで人を動かせてはいるものの、日本ほどの壊客はできていないというのが課鹿だ・問題点そのこは、逢築面にある。

香港で没計し、中国僻でつくった同店の建物は上梅で手にはいる材料をもって連てるよう発注。（ガラスに#ありとのこと）しかし、管理が行き届かなか勺た ので図面どおり壌九ず、耗潮は過れ、しかもやり薗しが生じることで更に時間がかかっ」たという。　電力事情においても電圧が50％近くまで落ちるなど変動 するので、停電することもしばしば。しかしこの問題もかなり改善されつつあるという・

この1年ほどの間に上海では伊勢丹や香港の合弁企業が合弁商品をメインで汲ぅsc（ショッピングセンター）を次々オープンさせている・このトレンドは上海の主流になっていくだろうと久保円氏。

ャォハンではこのテストショップ運営過程で待た経験やノウハウをもって、来る，95年12月に向けて大規模小売店舗をオープンする予乱合弁相手は、平日 20万人の人出でにぎわう上海で小売業ナンバーワンの上海市第一百貨仝司（国営）・資本金は約50億円で、ヤオハン側が55％、中国側が45％を出乱　合 弁時、中宮側が土地、ヒト・建物、日本側がカネと機械を提供し合い浦東新区に横面積44，000坪という東洋一のSCを展開する・初年度売上予測は、直 営・テナントを合わせて330値札来店客数は平日30万人を見込む・メンバーからの質鮭応答で、合弁のポイントについて久保田氏は、先ずいい合弁相手を探 すのが肝心という¢税金に関しては日本からの出向で年間180数日の滞在で税金が多くかかってくるので、交替制を取ったりすることで節税対策が必要とも・

郎永漢氏が上海でビルを建設していることを知る人も多いことだろうが、上海では外国人が常駐するアパートがひつぱくし、家賃も東京の都心並に高いという・

政治リスクを考慮してもその市場の大きさは測りしれず、「生産」から「消賛」に向かう時の人ロバワーに大きな期待を寄せている・

尚、この大規模小売店舗（上海新世紀商度・NEXTAGE）では事務所の分譲も予定しており、・94年の年明けから日本でも、テナントを募集するとのことだ。

中国視察レポート

10月26日

■上海市商会訪問・陸圃斉会長との接見

先ず、上海市商会とその会長について触れておこう・市商会とは即ち、日本での商工会議所と理解してもらえればよいかと思う・さしずめ陸さんは商工会議所の会頭といったところか。睦さんの正式な肩書きは、中国国際商会上海商会会長・中留国際貿易促進委員会上海分会会長・上梅世界貿易中心理事長・高級工程師 という一般ルートではとてもお会いできる人物ではない。

上海の経済を握る、市長の次の上海ナンバー2の人物といわれる建会長との接見が実現したのは、当クラブの常任理事兼中四国ブロック長でもある（株）国際トレーデイング社長の呂永伯氏の尽力のお陰であるd呂氏は上海でのビジネスの関孫上、睦会長とは非常に親しい仲にあり、この度の上海市商会の訪問にあたっては、事前にUGIiCについての具体的な説明をされていて、同時通訳を国際トレーデイング上海代理人の宋坪女史が行→てくださったので会談はたいへんスムーズに進行できた。この誌面を借りて両氏にお礼を申し上げます勺さて、会談において陸会長は熱烈歓迎の意を表明された後、中臥特に上海の経済状況について許しく述ぺられた。

中国は昨年以来、経済の発展スピードが急速に早まったという・その背景には不動産、株、そして金融関係の隆盛があるdその様相は日本のバブル経済をほうふつとさせる。　上海の昨年度GNPは前年対比14。8％アップし、今年の1月〜9月のGNPは同14，7％アップ（ちなみに全図水準では同8％アップ） そして同期間ににおける輸出は10％の伸び。

プロジェクト数は641項目にのぼり、金額べ–スでは124億ドルに達する。その内、外国からの投資順位は1位香港、2位米国、3位に日本、そして台湾とつづく。

日本の大企業もつぎつぎ上海に上陸しているという。三井、伊藤忠などの商社はもちろん、トヨタが現在交渉中といい、金融関係では日本からの投資が最も多 い。商業関係としては、先に訪問したヤオハンや伊弊丹などが大規積小売店舗に着手。建会長は上海発展のために3、2、1の順で外資を誘致したいという。そ れは即ち第3次産業、第2次産業そして第1次産業をチ旨す。

但し、高品質を泊求することに対してはきびしいと、安易な進出に対してはくぎをさすことも忘れない。同時に上海ではカケごとがご法度らしい。

上手毎ではカラオケが非常に盛んで、出店している企業は5，300社にのぼる。さすがにこの数は多すぎるとみえて、現在整理・蘭整中という。（ちなみに 料金相場は1人単価1〜2万といったところ）それに、「カラオケは娯楽としてはいいが徐々に複雑になる」との何か合みのある言葉も。

睦会長はあいさつの最後に、上海は貿易・投資を大歓迎するといい、貿易促進委貞会の他に投資コンサルタントもおいているので、ぜひ手短に相談してほしいと締めくくった。（この席にはコンサルタントの楽如貴部長も同席された）

VGBC側からは（株）アスコ社長の丈弘宜副会長が代表してあいさつをおこなった。双方のあいさつにつづき、下吾己のような質疑応答がなされた。

Q：パチンコの進出実繊はあるか？

A：上海では現在2社が営業し、台数にして200台といったところ。その他小規模店も数社あるが、今年5月に全面禁止となった。なぜなら、パチンコ自体は娯楽として認められるが・換金行為を行っているので禁止された。

Q：上海では100％外貨出資の会社はあるか？

A：ない。すべて合弁形態で、具体的には①合資、②合作、③独資、④他物資の4種。以前までの社会主義計画経済のもとでは、（モノやサービスの）価値と価格を95％まで国が決めていたが、今は市場の帝給に伴って決めている。

Q：現在、抽出入規制されている商品の扱いについて将来緩和される品目などはあるか？

A：取扱形態は3種で、①国家経営にのみ許可されている品目として、金・銀・油・鉄鋼・白金など。②国家の許可を憂するものとして、232渾目。③その他取扱自由なもの。

Q：トウモロコシやシルクについても今後、統制が続くのか？

A：それら品目は先の②に萌当し、数量・金額とも管理されていろ。

Q：上海で砂利や砂は輸出しているか？

A：上海ではしておらず、福建省、安牛省、江西省などでしている。

Q：上海は加工貿易地帯という位置づけか？

A：上海は金融、経済、貿易の中一心地。解放後、第2次産業を発展させ7こので加工、機械、電気、電子、経工業、紡績などが充実している。品目では156項目あり、その他工作機械や車、核発電所施設なども備えている。

Q：人件‡が高鹿しているようだが？

A：それぞれの会社によって異なるが、管理者クラスでは全体的に高くなるようだ。国家統制できるものでもなく、避けられない問題なのでは。

Q：第3次産業の進出を特に救迎するとのことだが具体的にはどういうものを？

A：金融、不動産、輸送、各種コンサルティング、商業、娯楽、旅行、そしてホテルなどだ。

Q：上海と北東とではGDPにどれほどの塞があるか？

A：上海では北京の2。5倍にあたる。

以上のような質」疑応答のあと陸会長は上海において頭の痛い問題として交通事情を挙げた。たしかに上海は抹程中、どこを向いて走っても渋滞していた。しかしこれも、過3日までの運転ローテーションやダンプの運転時間制限などの規制を行っての結果であるというから閉口せざるを得ない。21世紀に向けて超一流都市を目指すという陸会長。毎年、東京・大阪・横浜で中国製品の展示会を催しているという。来年は4月に大阪、6月には東京で展東金が催されるので一度足を運んでみてはどうだろうか。

会談につづいて睦会長を囲んでの会食では陸会長の人柄のよさなども垣間見られ、終始なごやかな雰囲気の中で行われた。

l浦東開発地区視察

一行は見わたす限り開発中の上海市荷を横切り、360平方kmを20〜30年かけて新しい市街区を建設するという浦東開発地区にあって、ヤオハンの建設現場を視察したり

浦東新区は①海外貿易地区、②港外加工工業区、③保税区に分け、当面これら地区を5年で開発するという。これだけの巨大プロジェクトを遂行するにあたり、国務院では投資を促すために、黒字計上年度から2年間の免税等、10の便通政策を採用している。

捕東開発地区を横目に一行は上海臨時政府跡地を見学したのち、上海名物の上海雑技団仝演を鑑賞。上海最後の夜が更けた。

中国視察レポート

▪10月27日
▪中国人民憧れの箭一深セン

上海でのハードスケジュールを終えた一行は空路、深センへと飛んだ。

時は11月を迎えようというのに、気温は27°C、人々は夏服のよそおいであった。

深センの主要通貨は香港ドル（1育港ドルは14〜15円）り　それもそのはずで深センは香港と目と鼻の先程に位置する、その歴史13年の中国初の経済特区である。

空港からオリエンタルリージェントホテルへと向かう途中、一行は第こ国境を越えた。ここは中国人自身も自由に往来できない。

しかし、住居者人口180万人に対し、流動人口も合わせるとその数は300万人に逢する0それほど深センはあこがれ・注目の的であるという。

但し、その内の約100万人は仕事がなく、ホームレスも多いという。自ずと治安も悪くなる・一行が滞在中、ホテル周辺には夜な夜な←花を売る乙女」なら ぬ、幼女たちが観光客の足に抱きついては離れず、お金を見せれば他の場所からも教人がすっ飛んでくるという光景に出くわしたb経済発展の陰の部分を垣間みる思いがした。

されど中国政府は・蒼富の差が多少生じようとも、経済の発展スピードを加速することを使先するという○第栄の光と陰のコン←ラストがますます鮮明に現れそうな、ちょっと危険な匂いがかおる筒一深セン。

到着の夜、一行は中国民族文化村を訪ねた¢イルミネーション輝く五重の塔をはじめ、多くの民族パビリオン・各民族の歌舞公演は共通した音色を感じさせ、 我々の胸にも何か響くものがあった0その上、演奏技術はかなりのものだと、芸術家出身のK氏をも唸らせていた。

▪10月28白
▪深セン開発の歴史を知る–「深セン博物結」と市内観光

⊥行が博物鮪に入るや否や一臍大ホールでは何やら絵画などの競売が行われていた。

このことは後日、西日本新聞を通じて知ることになるが、これまで低く抑えられてきた作家の収入を市場経済化に伴い少しでも高めようと企画された中国で初 の文学作品虎売会で、全国から選ばれた現代作家の作品11点が計250万元（約4，750万円）で競り落とされたものだという。

深セン全域について模型をみながら説明をうけた一行は、そのスケールの大きさに鴬嘆しつつも・工業団地が密集されていない点や環境保護の不備な点などに ついて指摘し、事実そうだとガイドがうなずく場面も。土産物売り場では、これまた裁売会ならぬ、メンバーたちによる値交渉が繰り広げられ、水彩画などが半 値にまで引き落とされるや各種絵画が多く買われた。

博物飴を一巡したのち、一行は貿易センターを経て、自由市場へ立ち寄った。

市場では生鮮肉や果物をはじめ乾物、或料などが4捌こわたり所狭しと並ぺられていて、値段も国内用とあってお手頃価格というか、たいへん安かった。ただし、犬やコウモリの丸焼きには多少、びっくりさせられたが・…。

香港は水が採れない地域だという申　その香港へ水を供給しているダムの一つが深センダムだ・この雄大なダム見学を終えた一行は深セン最後の訪問先、華強三洋電子有限公司へと向かった。

l拍三洋軒有限鋼妨問

FTGトラベルの計らいで訪ねた撃破三洋電子は、日本のサンヨーの100％独資金社である三洋電機（香港）株式会社と国営で広東省電子局の華魂電子稔公司との折半合弁会社だ0日本から出向されている企画部副部長の前田阜男氏に会社の全容をうかがった。

同社は従業員数1，700人、平均年齢28乱　生産魁晶は単純加工でまかなえる製品に限っており、5つの製造部門（テレビ工場、テレコ工場、ビデオ工 場、成型・塗装工場、自挿工場）で構成されている。生産台数は年間でカラーテレビ65万台、テープレコーダー150万台、VTR3万台、テレビキャビネット80万一台、そしてテレビ用PCBが65万台。役貞は日・中1対1の構成だ。

社員構成は、正社員：契約社員：臨時社員（25：25：50）で、平均賃金は1，000元（人民元）で正社員の定年は60歳。欠点が生じたりはほとんど ないので、定期採用はしないという。というのも、正社貞については親会社から派遣されており、決算上は篤会社へ派過料を支払う形を取っている。

独資に対して合弁の生産性は、平均貸金が同様でありながらも1。5倍ほどすぐれているという。

中国の労働現場では、しばしば良く働く者に対してねたみが横行するらしい。それというのもよくできる者には3倍からの貸金格差が生じるのと、自分たちへの要求性も高まり仕事が増えるからだという。

中国視察レポート

華強三洋もその例外ではない。

深センは急激な商業化に伴い、土地や人件費が急灘中　故に生産業は経営が困難であるという。深センが保税区であるということのみがメリットだ。先に説明 したように、合弁企業は生産物の70％を輸出しなければならない。同社では姶出がほとんど儲からずに足かせとなっているが、国内向け30％が魅力だという。

それもそのはず、ビジョンとして12億人口2億所帯の内、5年から10年先には2千万台のシェアを睨んでいるからだ。これは日本の仝メーカー合計の年間生産台数に匹敵するらしい。そのために今は、忍の一字でがんばっているという。

ゆくゆくは今の工場を本社と倉庫機能にとどめ、第2ボーダーで生産を行う方針だ。

現在も仕掛品を第2ボーダーに送り、そこで完成品とする形態をとっている。

第2ボーダーは保税区ではないが市内閤での加工品のやりとりには課税されないからだ。それほどに深センは土地や賃金の高騰が深刻なのである。

中国でのビジネス成功のポイントは人脈術にあるという。中国の人脈は日本での学閥などの人脈以上に強い。よって人脈を重要視しないと仕事が進まないのだ。

労組関係はどうか。労働組合は中国では認められていないという前提がありつつも、広東地域では“独資”の日系企業において70〜80％の賃上げ要求を一 揚げて、ストライキが頻発しているという。合弁企業である同社において労組は形だけが存在し、賃金交渉などの享舌動はせず、福利厚生関係のみを管理する。

現場における共産党支酉己などもほとんどなく、人事などに口出しすることはない。

最後に、利益は内部留保（投資等）に回しているとのことだ。今、深センでは香港人、華僑、そして台湾人などの投資によってまさにバブル現象が生じている。

分譲マンションの価格は前年対址2倍という。また、株神話が横行しており昨年8月の株腐動時には挙魂三洋も工場を止めたほどだ。過剰な中国投資に対して警 鐘を鳴らす日本のエコノミストさえいる。しかし中国市場が消ｃに回る時のその規模とパワーはそれこそ計り知れない。

日本におけるバブル経済の経験と教訓を生かし、地士或性と民族性をよく理解す1深センよ後の夜『さよなら′く–ティー』

上海と深センの視察スケジュールを終えた一行は心地よい疲れと充実感をもって深セン最後の夜を迎えた。パーティーでのドリンク類はFTGトラベルのオーナー・妻明求副会長の一心遭いとのことで遠慮なくご負担いただいた。

旅の名残を惜しみつつ一同はこの度の視察旅行の有意義さについて語り合うとともに、UGのあるべき姿や在日としての人生論など忌たんのない意見が交わさ れた。マジな話しの後には、カラオケマイクから流れるメンバーたちの唄声が夜のしじまをぬって深センの衝に響いていった。

▪10月29日

▪看護を通り抜け、帰路へ

深センから香港へと抜ける国境は数珠つなぎのトレーラーでごった返していた。毎日のように24痔聞、中国本土から香港へ様々な物資が流れる。中国側税関は以外とすんなり通り抜けた。

天安門事件直後からは想像もつかない程、楽に通れるようになったそうだ。一方、香港の税関はものものしい雰囲気が漂う。

上海、探センがこの衝のように変貌していくのだろうと思いを巡らせつつ香港市内に到着した一行は、久しぶりの朝鮮料理をパクついた。本場の中国料理に舌鼓を打ちつづけた妹を辞めくくるのには、やはり朝酵料理でしかなかった。

まさに駆け足旅行だった、この度の上海〜深セン視察旅行。

視察旅行にかこつけ、その実、観光旅行でしかない日本の県・市議会のそれとはまさに異なり、もう少し観光があってもいいのではと思えるほどの高密度・ハ イレベルな視察旅行がかなったのも、一重にVGビジネスクラブだから成し得たものだと、参加メンバー皆が確信したと思う。

到着空港別にそれぞれのメンバーを乗せた飛行機は、我々を歓送するかのように晴れわたった香港空港をあとに飛び立った。

UGBC本部事務局　文章好

ブロック・部会ニュース

情報交流事業分科会　発足

「遊技業分科会」が発足。23名が参加、関心の高さを示す

遊技業分科会発足に向けての懇談会が去る11月20日、東粛のホテルパシフィックで催された。オブザーバー4名を含む業界関係者23名が参加し、当分科会に対する関心の高さをうかがわせた。

発起人である東北ブロック長兼常任理事の鄭恙雄氏が冒頭、基調報告の中でUGにとって初めての試みということもあって、皆が意見を出し合って討論し、分 科会の方向性を絞り込み、木を見て森も見る姿勢でUGとして何ができるかを「本音」をもって話し合いたいと訴えた。

参加者全員が異口同音に分科会への期待を表明するとともに、様々な意見が交わされた。

３時間にわたる議論の未、打ち出された今後の方針となる一つのコンセンサスとしてはUGとして、在日として、そして業界人として、①市場変化・展望・顧 客ニーズなど業界に感する同感垂幅広く研究する、マクロ的視野　②経営システムの近代化・企業理念・イメージづくりなど共同研究し、スケールメリットを活 かす、ミクロ的視野についてつっこんで研究し、細分化していこうと意見が一致。

責任者として鄭志雄氏が全会一致で推され、以下、ブロック毎の担当責任者が選出された。

今後の運営方針とその方法を練るため、役員会を年内に催すことが確認された後、親睦を図るための懇親会が催された。

ブロック・部会ニュース

情報交流事業分科会　発足

’93年度第3回理事会及び関東ブロックメンバー参加による講習会が開催

去る12月8日、東京ステーションホテルにおいて93年度第3回理事会が行われた。

当理事会ではブロック・部会活動の強化、企業見学会についての協議、そしてその他規定について審議された。

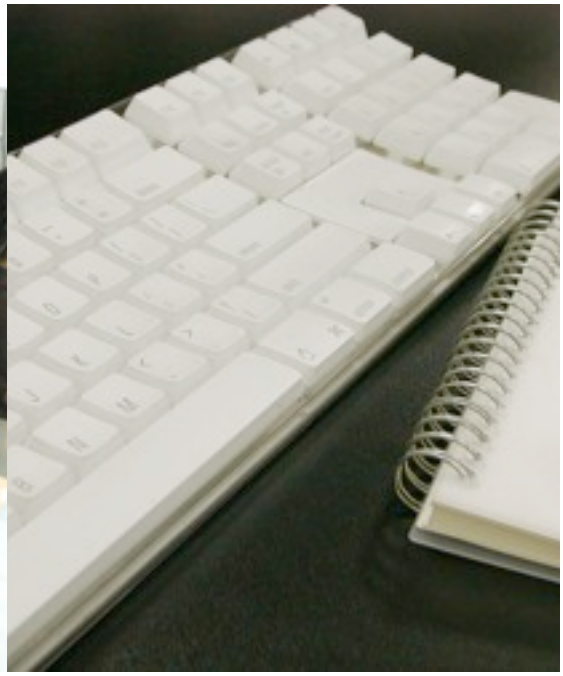
会議後、関東ブロックメンバー参加のもと韓国籍で初めて弁護士資格を取得され活饉中の金敬得先生を迎えての講習会が行われた。

講習会では詳しいデータ資料をもとに、「在日同胞の法的地位と生活–現状と将来–」というテーマで講演が行われ、質薙応答とともに懇親会が開かれた。

講演では特に、急増する帰化者や国際結婚についてふれ、民族学校の重要性や積極的な意味においての民族的アイデンティティーの必要性が強調された。

今回の講習会を皮切りに今後、理事会の後にはかような講習会や勉魂会を定例化する予定だ。

理事会開催地城のブロックメンバー及び非会員も対象とするので、どしどし参加を促したい。



Summary Reading　ガルブレイスを読む

「満足の文化」（中村達也訳　新潮社）

はじめに

ガルプレイスと言えば、その代表作として『不確実性の時代』が一般的に知られている。この本の産名は流行語にまでなり、どちらかといえば”情報化時代における世の中の変化の予測困難性”といった意味合いで用いられていたように思う。

しかし、ガルプレイスの論旨は、そのような一時的な状況分析を行ったものではなく、「もっと普遍的な意味において、経済社会というものは、不確実なもの なんだよ」と説いていた。「その不確実な世界の中で、マルクス（理論）もケインズ（理論）も存在したにすぎないのだよ」ということが、ガルアレイスの主張 だったように感じる。

ガルプレイスの新著『満足の文化』は、その底辺にある視点はやはり、『不確実性の時代』と共通するものがある。

“個人と集団が願望をかなえようとする意識”がこの本の主題なのだ、とガルプレイスは冒頭語っている。

日本は現在、保守政治一色時代を迎えた。この裏側に、日本人の自己満足の感情を読み取ることは、さほど困難なことではない。

この自己満足の感情を、ガルプレイスは「満足の文化」と名付けた。日本でもアメリカでも、さらには在日朝鮮人社会においても、この「満足の文化」を支える人々が支配的な政治影響力をもつようになった。

彼らの特徴は、長い時間をかけて問題を解決することを嫌う。それよりは、なにもしないことの方を望む。なぜなら、彼らは自分達の現在の生活水準に満足し ているのだから、変化をもたらすために自分達が代償を支払わねばならないような事態を、回避するように行動するからである。

このような憫足の文化」の時代の到来が、日本でも目の前に追っていることと、日本の政治が翼賛件制へと移行し、在日朝鮮人が日本社会への同化への速度をはやめていることとの間に、因果関係があることは、直感的に感じることができるだろう。

このことを論理的に理解するために、ガルプレイスを読んでみたいと思う。

1．「満足の文化」の表層

「不確実性の時代」にあって、歴史の教訓は鵜呑みにすべきではない。しかし、次のような活かすべき歴史の教訓もある。

それは、経済的、社会的、政治的な側面において有利な状況にいる個人や集団が、自分達が享受しているものを社会道徳に反することなく、政治的永続性があるものとみなしているということである。

裕福な人々は、この自分達の満足を保証してくれるような大義名分を見つけだす。さらに、その時代の経済思想や政治思想が同じように、彼らを支えるように作用する。このような大義名分に奉仕し、報酬を取得する人々も存在する。

日本で現在、偉い人達によって行われている減税論議が、高額所得者に有利なものであり、それ以外の人々には不利なものであるということが、この良い例であろう。

ガルプレイスは、次のように言う。

「重要なポイントは明白である。幸運で恵まれている人々は、明らかに、自分達の長期的福利を考えて反応したりはしない。むしろ彼らは、当座の平安と満足 に精力的に反応する。これが一般的気分というものである。そして、これは資本主義社会（と今でも呼ばれるもの）だけに当てはまるものではなく、もっと根の 深いもっと人間の本性にかかわる問題である。」（17ページ）

社会主義と資本主義が対立していた時代、資本主義に対する信頼や信念といったものは、支配権を握っている満ち足りた小数のものであったのが、いまやその信念が多数派のものとなったということに注意を払うべきである。

というのは、このことはすなわち、日本における「変化を望まない階層」の拡大を意味するからである。このような状況の中で広まっていくデモクラシーと は、あらゆる市民のためのデモクラシーではなく。自分達の社会的経済的利益を被るために実際に投票所に行く人々のデモクラシーとなる。そして、今や多数派 となった満ち足りた人々の信念に適合する政府が生まれるのである。

Summary Reading　ガルブレイスを読む

「満足の文化」（中村達也訳　新潮社）

2．満足の社会的性格

「満ち足りた多数派」は、実際に投票行動をするという市民という意味において、「満ち足りた選挙多数派」とも呼べる。

彼らは常に、外見上はデモクラシーという装いの下で支配する。このデモクラシーには、恵まれていない人々は参加していない。

我々「在日」には非常に理解しやすいことだが、政治的態度に関して、「満ち足りた多数派」とは異なる少数派が世の中には存在する。そしてその少数派は、無視できるほどの少数派ではない。

彼らは、目先の欲や快適さに心を奪われることから生じる危険を恐れる。純粋な意味での社会的関心（理想や洞察）は生き続けているのである。

ところが、満ち足りた多数派を支配している気分は、自己に対する寵愛であり、それが行動基準ともなる。彼らは自分達の自己満足状態を脅かすものに対しては、怒りをあらわにする。

「満ち足りた多数派」の第一の特徴は、自分達の収入に対するこだわりである。彼らにとって、自分達が手にするものは、個々の知性や努力の結果なのである匂彼らは自分達が享受するものを減らすような措置に対しては、撞抗を示す。

では彼らにとって、満ち足りた多数派」に反対するジャーナリストや反体制活動家はどのような存在なのだろうか。結論的には、このような存在は、彼らにとって決定的な脅威にはなりえない。

というのは、反対派が存在する余地があるという意味で、彼らのデモクラシーにも「便利」な側面があるということを、反対派自らが逆に証明してしまうからである。

「満ち足りた多数派」の第二の特徴は、先にも述べたが、何もしない政策を好むということである。長期的な政策は、裕福な楷層に現在の負担を強いる可能性 があるからである。彼らは、アダムスミスのように、物事を神の見えざる手にゆだねるのである。（「満ち足りた多数派」が、環境問題に対してとっている態度 を見よ。）

「満ち足りた多数派」の第三の特徴は、国家を重荷と考えているということである。すなわち、税金はできる限り払いたくないし政府支出も少ない方が良いと思っている。

かといって、自分達に対する政府支出は減らしたいとは思っていない。それは、社会保障費であったり、高額の医療保障であったり、銀行への財政援助だったりする。

彼らが減らしたいと思っているのは、おもに貧しい人々に対する支出と考えられる。

この三番目の特徴は、彼らの四番目の特徴へとつながっていく。

すなわちその四つ目の特徴とは、快適な人々は、大幅な所得格差に対して寛容であるということである。

彼らの根底にある考えとは、次のようなものであろう。裕福な人間は、自分の所得を守るために、他人が得るより大きな所得に寛容でなければならないのだ。 さもなくば、自分達にも増税の道が開かれてしまう。裕福であればあるほど人間は、所得の再分配をいやがるようだ。

以上の四つの特徴は、「満ち足りた多数派」の生活を機能的に支えている、様々な別の階層が存在することを証明している。

3．下層階級の機能

ガルプレイスの記述の中で気をひかれたのは次の一節である。

「下層階級がより大きな経済過程の分かちがたい一部分となっていること、そしてより重要なことだが、恵まれた人々の生活水準と快適さがこの階級によって 支えられていることはあまり認識されておらず、まためったに話題にされることもない」　産業社会にあって、下層階級は必要不可欠な存在である。というの は、下層階級の人々がその抑圧から逃れたなら、必ず補充が必要だからである。

社会の正面にでるのは、常に満ち足りた人々の都合であって、彼らの存在は背後に隠れてしまう。

これと関連して、次の基本的事実が理解されるだろう。

先進国の経済にあっては、誰からも嫌がられる辛い仕事は、恵まれた人々ではなく貧しい人々がやらねばならない。このような職業についていた親の子供達は、肉体労働ではない快適で報酬のよい生活を送る。もしくは、そのための努力を行う。

このことは、道徳に背くものでもないし、賛成すべきことだろう。しかし、このために、一部の人々は下層階級に引きとどめられ、または補充されるのである。

Summary Reading　ガルブレイスを読む

「満足の文化」（中村達也訳　新潮社）

「在日」の中で専門職といえば、圧倒的に医者が多く、弁護士や会計士、あるいは学者やジャーナリストが絶対的に少ないのも、このような日本を含め た先進国のシステムと日本の差別構造の相乗効果が原因だとも考えられるだろう。結果的には現在、在日朝鮮人も日本人と同様楷層分化し、「満ち足りた多数派」に属する人々から下層階級まで、その幅は広がった。

そして日本全体からみれば、「満ち足りた多数派」の登場によって、下層階級の幅が確定し変化しなくなってくると、それは社会不安の原因となるだろう。（アメリカの都市部の不穏状況を見よ）。

だが、社会不安を作り出すのは、下層階級そのものではなく、満ち足りた人々自身なのである。なぜなら彼らの理屈は、下層階級自らを助け自ら福祉すればよい、というものだからである。

満ち足りた人々の論理の特徴が、ここに端的に表れている。

４．金融荒廃の放任

満ち足りた人々は、市場のメカニズムを聖域だと考える傾向がある。満ち足りた人々にとっては、市場は自分連に恩恵をほどこす具体的な手段なのである。だ からたとえ公的な力であったとしても、市場に介入することは、彼らにとっては、あってはならないことである。　しかし、市場のシステムが不平等で不完全な ものであることは小学生でも知っている。この市場の不完全さは、失業保障や独占禁止法、社会保障累進課税などによって緩和され、資本主義は延命することが できた。

だが、ガルアレイスは、このシステムを構成する諸制度（企業の販売、購買、金融）の中に、このシステム自体を破壊するカが潜んでいると考える。

ガルプレイスいわく、「現代資本主義の自己破壊的傾向は大企業から始まる」。（ガルプレイスがこの本を書いたのは、日本でゼネコン疑惑が起こるずっと前である。）

特に荒廃がみられるのは、経営者支配型の大企業である。というのは、企業の所有者は多数の株主であったとしても、権力をもっているのは経営者だからであ る。経営者が株主のために利潤極大化のために働くという前提は、純粋な理論上のものでしかなく、実際はそんなことはありえない。

ゼネコンの例をみるまでもなく、経営者が株主の支配を離れたならば、経営者は自己の利益を最大とさせるように行動する利己心を想定することは、非常に有 効なことなのだ。特にアメリカではこの例がひどく、重役の収入は工場労働者の２０倍という統計もあるくらいである。

このような経営者支配型の企業は、必然的に経営権の保全ということを軸に行動するようになり、（特にアメリカでは）企業貞収や合弁の件数の増加という現象へとつながった。株の買い占めが、新製品や研究開発への投資よりも率先したのである。

エム・アンド・エーといえば聞こえはよいが、社会的、経済的にみれば問題点も少なくない。

そして、この合弁吸収は、バブル経済の誕生と破壊への布石となった。その後の証券スキャンダルと金融機関の不良債権の増大は、あえて説明の必要はない。

銀行の立場からすれば、本来は高額の貸付はリスキーなものなのだが、1980年代後半、銀行はその扱いに対して、慎重さと配慮をまったく欠いたのであ る。金をたくさん借りる人間が重きをなした時期があったのである。現在、銀行は決して保守的ではなく自己破壊的性質を備えていることが明らかになったとい えよう。

満足の文化は、自由放任が優先するから、金利を含めて金融システムの規制線和を実施するにいたった。これが、荒廃へのワンステップであったことは、簡単に理解できる。

これらはすべて、現代資本主義のシステムそのものが引き起こした問題なのである。

Summary Reading　ガルブレイスを読む

「満足の文化」（中村達也訳　新潮社）

５．満足の政治

「満ち足りた多数派」は「満ち足りた選挙多数派」ともおきかえられる。アメリカにおいても日本においても、政治行動を規定するのは彼らの存在である。

レーガン、ブッシュと政権が続いた共和党は、アメリカの快適で満ち足りた人々の公認の代表である。赤字予算を厳しく非難する声は多かったが、共和党の関心は長期的な問題よりも短期的な平安へと傾いていったのである。

だが、民主党に投票する人々が少数派かといえば、そうではない。そのうちの大多数は満ち足りた人々であり、彼らが民主党を支持するのは、地域や家族の伝 統に従ったにすぎない。もし、民主党があまりに恵まれていない人々を重視する公約をしていたならば、クリントンは当選できなかっただろう。福祉や保険、教 育施設の改善、麻薬のリハビリといった努力目標を掲げるにしても、それは控えめにするという姿勢が民主党内の大半を占めるのである。

当選するためには、満ち足りた人々の社会を侵略してはならないのである。

では、恵まれない人々、少数派にとって投票はどのような意味をもつのだろうか。

ガルプレイスは「貧困に打ちのめされている彼らにとっては、投票は無意味」であると結論づける。というのは、すぐに解決できるような問題については、両党の政策に差異はないからである。

こうして多数派のルールが形成されていくのである。

ここで日本の政治がどうか、という問題設定はあえて必要ないだろう。社会党は弱腰なのか、という疑問は無意味である。社会党を変えたのは、その支持者たちなのである。責任は満ち足りた有権者の側にある。満ち足りた人々が参政権を独占しているのである。

おわりに

ガルプレイスは、この本の最後に将来の予測を行っているが、それも決して楽観的なものではない。満ち足りた人々が選挙において少数派になれば、「満足の文化」は質を変えるかもしれない。

それにはこ通りの場合が考えられる。　まず一つ目は、経済が沈滞し、満ち足りた人々の絶対数が減少する場合である。

二つ目は、有権者の幅が拡大して、現在選挙権をもっていない人々を含むようになることである。

ガルプレイスは、人間としての要求と救済を旗印に掲げるアメリカ大統領候補が登場する可能性を議論している。上の二つ目の状況が現実となったら、そのような候補が多数派を形成できるのだが。見通しは、決して明るくはない。

自らの経済に対するありかた、政治に対するありかたについて、襟を正す時期が来ているのではないか。このことを、個人レベルではなく企業単位、組織単位、国単位で考えるべきだと、ガルプレイスを読んで感じたが、満ち足りた人々にはたして通じるのだろうか。　　（李　承）

1908年カナダ生まれ。1931年カリフォルニア大学パークレー校を卒業。1943年〜1948年『フオーチュン』誌額集委員。1919年ハーバード 大学経済学部数授となる。1961年〜1963年にはインド大使、1972年にはアメリカ経済学会会長も務める。現在、ハーバド大学名誉教捏。著書には『アメリカの資本主義』『大強行1929』『ゆたかな世会』『新しい塞業国家』『軽沃学と企共目的』『不一確実性の時代』『経済学の歴史』『バブルの物 語』など多数ある。